2．福岡平野出土の楽浪系土器

財団法人大阪市文化財協会
寺井　誠

「奴国」の所在地とされる福岡平野はこれまで楽浪系土器が少ないとされてきた地域であるが、近年の調査の進展や既報告資料を再検討した結果、博多・比恵・那珂・雀居・下月隈Cの各遺跡で出土を確認することができた。なお、ここで楽浪系土器の定義を十分に説明する余裕はないが、下記の4点を基準に認定した。まず、第一に内面に平行文もしくは同心弧の当て具痕跡があること、第二に平底の底部に静止糸切り痕があること、第三に器面にロクロ回転によるナデが施されていること、第四に還元焔焼成軟質（以下では、「瓦質」と表記）で胎土が泥質であること（滑石混和土器や石英混入系土器を除く）、である。以下で紹介する資料については報告では楽浪系土器と記されていないものもあるが、すべて筆者が実見し、確認したものを挙げた。よって、その責は筆者にあることを最初に断っておく(注)。

福岡平野における楽浪系土器は表のように、管見による限り14点あり、短頸壺（の可能性があるもの）、壺、椀、筒杯、盆といった器種が確認されているが、壱岐や糸島で出ているような滑石混和土器は出土していない。那珂遺跡21次調査のSK48・49出土資料（図の8～10）の胴部片はおそらく短頸壺の破片と思われるが、日本列島に楽浪系土器が搬入される先駆けのものである。一方、筒杯（図の7・12）は古墳時代前期初頭～前葉、椀（図の11）は古墳時代前期初頭、平底の盆（図の6）は古墳時代前期前葉の地層・遺構から出土している。楽浪郡では筒杯や平底の盆は2世紀以降に登場すると考えられており（鄭仁盛2003・2004）、これら福岡平野の事例は楽浪郡での年代観に矛盾ないといえる。なお、高畑遺跡19次調査ではハケで仕上げられる平底で円筒形の土器が出土しており（図の14）、筒杯を模倣した可能性もあると考え、問題提起のため挙げた（第799集）。筒杯の模倣品は原の辻遺跡（鄭2003）や岡山県の門前池東方遺跡（則武他1994）でも確認されている。

一方、福岡平野では弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて三韓系土器も出土している。雀居遺跡4・5次調査（第405・406集）では、瓦質の格子タタキの土器や在地で製作の可能性がある縄文タタキの土器などが約30片出土している。また、比恵遺跡6次SE30（下大隈式古相）の上層で縄文タタキの瓦質短頸壺の底部（第130集）、同79次調査SE008（庄内式併行期）から巾着袋形壺が出土している（第821集）。須玖遺跡群一帯では、須玖永田遺跡で外面が縄文タタキ、内面がナデで仕上げられ、平行文の当て具痕跡が見られない瓦質土器が数片出土しているが（春日市教育委員会1987・2005）、楽浪系土器の出土例はない。

ここで全国的な楽浪系土器の出土状況について簡単にふれてみよう。楽浪系土器は対馬・壱岐・北部九州を中心に出土しており、島根県鹿島町沖でも確認されている。出土時期は主に弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭で、前期前葉以降は三韓・三国系と入れ替わるようにして、急激に減少する（寺井誠2005）。

出土量が圧倒的に多いのは、壱岐と糸島である。壱岐の原の辻遺跡では100点を超える楽浪系土器が出土しており（宮崎貴夫2005）、糸島では数遺跡での出土が確認され、特に三雲遺跡番上地区では一箇所で30点あまりがまとまって出土している。以上2地域に関しては古墳時代前期初頭以前に限るなら、楽浪系土器が三韓系土器の出土量を凌駕し、出土器種も福岡平野よりも多く、滑石混和土器も出土している。一方、対馬での出土量は少ないが、近年調査が行なわれた対馬市峰町の三根遺跡山辺地区で数点出土していることから（峰町教育委員会2003）、今後の調査の進展で増加する可能性も残

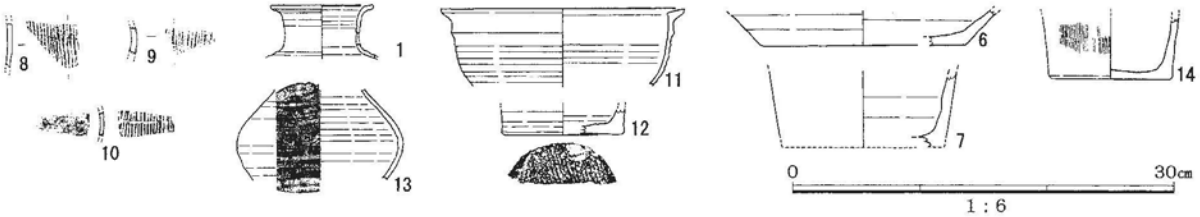

Fig. 169　福岡平野出土の楽浪系土器

される。また、早良平野ではコノリ遺跡で１点出土しているのみである（第728集）。

福岡平野では三韓系土器の出土量が多い雀居遺跡を除けば、楽浪系土器が三韓系土器よりも量が多いといえるが、これは庄内式併行期以前の日本列島への朝鮮半島系土器の出土傾向と一致する。ただ、先行研究で指摘されているように、糸島と比べると三韓系が多いのも確かである（武末純一2004）。今後の調査の進展でこの割合がより増減する可能性も十分考えられ、評価については将来的な課題としたい。

本稿をなすに当り、資料を観察し、執筆する機会を与えてくださった調査担当者の山崎龍雄氏、資料調査の際にさまざまなご教示を下さった常松幹雄氏、瀧本正志氏、久住猛雄氏に心より御礼申し上げます。なお、本稿に関わる研究は科学研究費補助金（若手研究（B）17720206）の助成を得た。

注　図の**11・13**については寺井が実測したものをトレースして用い、参考文献については遺物を観察の上、報告書の図を改変した。また、**6・7**については、2006年報告予定の比恵遺跡91次調査の実測図をトレースして用いた。

参考文献（紙面の制約上、福岡市教育委員会発行の報告書は文中で通し番号を示すにとどめた）
春日市教育委員会1987『須玖永田遺跡』
2005『須玖永田A遺跡』２
武末純一2004「遺物からみた楽浪郡と北部九州の交流－土器を中心に－」『海を越えたメッセージ～楽浪交流展～』伊都国歴史博物館
鄭　仁盛2003「楽浪円筒形土器の性格」『東京大学考古学研究室紀要』第18号
2004「楽浪土城の土器」『韓国古代史研究』34 韓国古代史学会（韓国語）
寺井　誠2005「朝鮮半島系土器」『九州における渡来文化の受容と展開』九州前方後円墳研究会
則武忠直・岡秀昭・塩見真康1994「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』32
峰町教育委員会2003『峰町日韓共同遺跡発掘事業記録集』
宮崎貴夫2005「土器（弥生土器・古式土師器,朝鮮半島系土器）」『原の辻遺跡　総集編』Ⅰ

Tab. 5　福岡平野出土の楽浪系土器一覧（一部早良平野を含む）

No.	器種	遺跡名	遺構	備考	時期（註1）	文献	報告図
1	壺口縁部	博多17次	SB169	泥質胎土で内外面にロクロによるナデ。別個体と報告された2点は同一個体の可能性高い。	（古墳前期）	第118集	17－2・3
2	胴部片	比恵16次	古墳周溝	外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕	古墳前期	第174集	49－101
3	胴部片	比恵16次	古墳周溝	外面縄文タタキ、胎土が泥質	古墳前期	第174集	49－102
4	胴部片	比恵18次	P-164	外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕		第227集	87－32
5	胴部片	比恵50次	SB204柱穴	外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕		第451集	（註2）
6	盆	比恵92次	包含層中層	底部平底でロクロによるナデの痕が残る、泥質胎土	古墳前期前葉	第898集	29－235
7	筒杯	比恵92次	SC13	ロクロによるナデの痕が残る、泥質胎土	古墳前期初頭	第898集	29－234
8	胴部片	那珂21次	SK-48	外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕	弥生中末～後初	第291集	232－73
9	胴部片	那珂21次	SK-48	外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕	弥生中末～後初	第291集	232－74
10	胴部片	那珂21次	SK-49	外面縄文タタキ後沈線、内面平行文当て具痕	弥生中末～後初	第291集	239－32
11	椀	下月隈C4次	SD116	口縁端部は断面三角形に張り出す、内外面ともロクロによるナデの痕残る	古墳前期初頭	第750集	PL. 82－545
12	筒杯	下月隈C7次	SD818	底部に静止糸切痕、内面にロクロによるナデ	古墳前期前葉	本書	72－118
13	壺胴部	雀居4次	SD03上層	胴部内外面にロクロによるナデ器表は灰色で、破断面は灰白色の瓦質焼成	古墳前期初頭	第406集	131－1233
14	筒杯模倣品？	高畑19次	SD-030	円筒状の器形で、外面にハケが施される	古墳前期初頭	第799集	12－28
15	胴部片	コノリ3次	包含層	外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕		第728集	15－114

（註１）上記表の時期区分について、「弥生中末～後初」は須玖Ⅱ式新段階～高三瀦式古段階、「弥生後期後半」は下大隈式、「古墳前期初頭」は近畿地方の庄内式に併行する時期、「古墳前期前葉」は布留式古段階に併行する時期を指す。
（註２）この資料は報告書には掲載されていないが、久住猛雄氏よりご教示いただいた。なお、注記には「HIE50　SB204　SP2028　940127」と記されており、古墳時代後期の掘立柱建物から出土したことがわかる。